



TITLE:

京大広報 号外 1

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 号外 1. 京大広報 1996, 9604g1: 1-9

ISSUE DATE:

1996-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209276>

RIGHT:



京大広報

号外 1

1996. 4

目次

〈卒業式・学位授与式〉

卒業式における総長のことば……………2

修士学位授与式における総長のことば……………5

博士学位授与式における総長のことば……………7

〈大学の動き〉

平成7年度修士学位授与式……………8

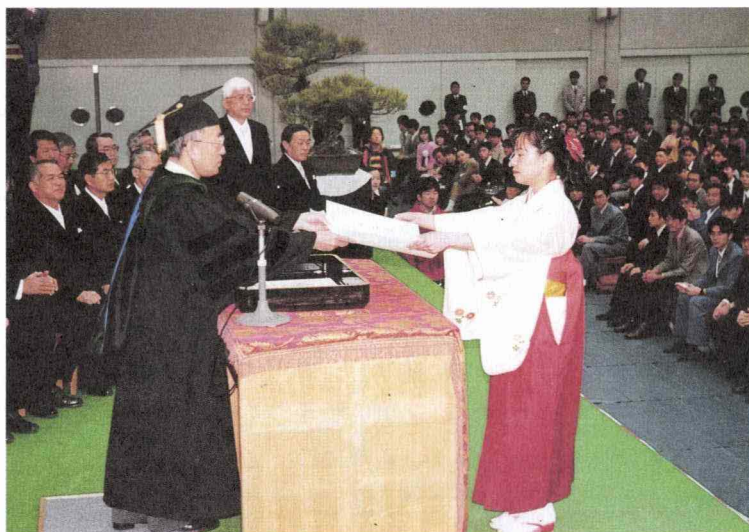
平成8年3月博士学位授与式……………8

平成7年度卒業式……………9

〈医療技術短期大学の動き〉

平成7年度医療技術短期大学部

卒業式・修了式……………9



平成7年度卒業式

卒業式・学位授与式

卒業式における総長のことば

平成 8 年 3 月 26 日

総 長 井 村 裕 夫

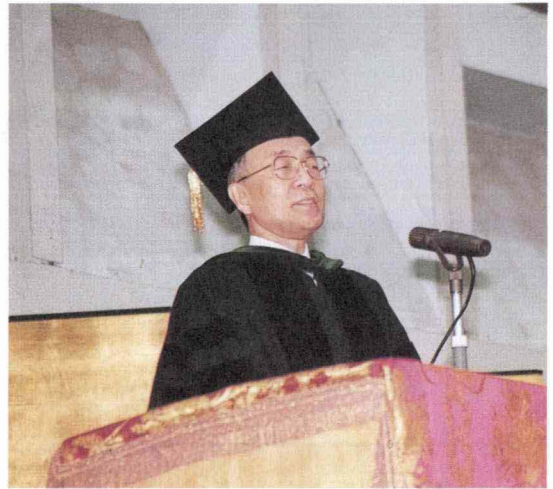
ひとときわ寒さのきびしかった冬も終りを告げ、明るい陽光に包まれて春が訪れて参りました。野の花、空の鳥も生命の讃歌を奏で、学園を巣立つ若人の前途を祝ってくれるかの如くであります。

本日は元総長、名誉教授の諸先生を来賓としてお迎えし、各学部長、教職員、御父兄の方々の御臨席のもと平成 7 年度卒業式を挙行し、文学 229 名、教育学 87 名、法学 423 名、経済学 293 名、理学 306 名、医学 97 名、薬学 88 名、工学 995 名、農学 331 名、計 2,849 名の諸君に学士の学位を授与できましたことは、京都大学として誠に喜びとするところであります。

卒業生諸君、本日はおめでとうございます。今日学士の榮譽を得られたことは何よりも諸君の撓ゆまぬ努力の結果であります。同時に今日まで諸君を慈しみ育てて来られた御父兄や、諸君の人間形成に貢献された多くの方々のお蔭でもあり、そのことを感謝してほしいと思います。

諸君の中には大学院に進学し、専門の領域の勉強を続ける人もかなり多いと思います。しかしより多くの人は社会に出て様々な職業につくことになるであらう。いずれにせよ諸君が活躍する時代、それは 21 世紀の前半であります。この時代には従来のような経済成長は恐らく難しく、人口の爆発的増加と資源の枯渇に直面して、人類の生存と地球環境の保全をかけた懸命な努力が求められる時代になるかも知れません。そして国家を越えた交流は一層活発となり、様々な面でグローバリゼーションが進むものと考えられます。日本国内のみに目を向けることなく、人類の未来のために地球を舞台に思い切り活動して下さい。

諸君の新しい門出にあたり、私は最近感じた二つのことを申し上げたいと思います。その一つは科学とは何か、あるいは“科学の精神”とは何かを問い直すべきであるということでもあります。昨年にはある宗教団体が引き起こしたのではないかと考えられるサリン事件という、大変衝撃的な事件がありました。呪術あるいは秘術によって人を引きつける宗教



はいつの時代にも存在しますが、科学を学んだ人が多く入信したという点で、大変特異な事件でありました。私にとって理解できなかったことは、大学院で物理を学んだ人が、なぜ“空中浮遊”を信じたのか、医学を学んだ人達が酸素なしでなぜ水中に長時間潜ることができることを信じたのか、ということです。

現代社会でも人は超能力や魔術などオカルトに興味を持ち、その実在を心のどこかで信じている人も少なくありません。たしかに科学の発展の歴史を見ますと、占星術や錬金術など現在から見れば非合理的なものへの憧れが、科学的な発見につながったという面もあります。しかし万人を納得させる「知」として認められるためには、労苦に充ちた努力と、科学的な思考法が必要でありました。いま問題となっている宗教を信じた人々は、そうした知を生み出す方法を修得しておらず、安易に魔術の世界へ飛び込んでしまったのではないかと思います。言い換えれば彼らは科学の成果を学び、技術も持っていたが、以下に述べるような意味での“科学の精神”は学んでいなかったもので、容易に非合理的な世界へ飛び込んでしまったのではないかと思います。

科学 science はラテン語の scientia から来た言葉で“知ること”を意味します。哲学の語源となったギリシャ語の philosophia も“知への愛”という意

味であります。“知ること”，“知を愛すること”はヨーロッパの学問の伝統であると言えます。従って私がここで言う“科学の精神”とは自然や人間社会の現象に強い関心を持ち、その本質について分析的、論理的に考えて、基本的な法則を明らかにして行くことであると言えます。ヨーロッパではこうした思考法が長い歴史の中で培われ、育て上げられてきました。もちろん科学の進歩には“ひらめき”や直観が大きい役割を果たすことがあります。そこから普遍的な原則まで導く過程には、科学的思考法が必要であることは言うまでもありません。こうした“科学の精神”を身につけていれば、“空中浮遊”などとうてい信じられないでありましょう。

しかし科学の本質を考えようとする努力が乏しいのは、日本人全体の通弊ではないかと私は考えます。明治の初年わが国は欧米より科学を導入しました。しかし日本人が欲しがったのは、科学のもたらす果実であって、科学そのものを日本で育てることではなかったと考えられます。明治の初め東京大学において内科学を講義したエルウィン・フォン・ベルツは、その在日25周年のお祝いの席で、このような席には適当でないとしながらも、次のような苦言を呈しました。

「わたしの見るところでは、西洋の科学の起源と本質に関して日本では、しばしば間違った見解が行われているように思われるのであります。人々はこの科学を年にこれだけの仕事をする機械であり、どこか他の場所へたやすく運んで、そこで仕事をさせることのできる機械であると考えています。これは誤りです」。このように述べた後、ベルツは西洋の科学は機械ではなく一つの有機体であり、ギリシャ以来幾多の傑出した人々がおびただしい汗と血を流して築いた精神の大道であること、日本にきた外国人はこの精神を教えるためにきたことを述べ、次のように話しました。「外国人の教師の使命はしばしば誤解されました。もともと彼らは科学の樹を育てる人たるべきであり、またそうなると思っていたのに、かれらは科学の果実を切り売りする人として扱われたのでした。かれらは種をまき、その種から日本で科学の樹がひとりでに生えて大きくなれるようにしようとしたのであって、その樹たるや、正し

く育てられた場合、絶えず新しい、しかもますます美しい実を結ぶものであるにもかかわらず、日本では今の科学の“成果”のみをかれから受取ろうとしたのであります。この最新の成果をかれから引継ぐだけで満足し、この成果をもたらした精神を学ぼうとはしないのです」。

このベルツの批判は、残念ながらそれから百年たった現代の日本にも当てはまります。戦後の日本は欧米の技術を導入して工業を発展させ、世界有数の経済大国となりました。わが国が未曾有の好景気に湧いた1980年代、基礎的な科学の重要性を指摘する声はほとんど聞かれませんでした。ところが経済不況が訪れ、わが国の産業が行き詰まりを見せると急に基礎科学の振興が叫ばれるようになったのであります。もちろん基礎科学への研究投資を増やすこと自体は大変重要なことで、大いに歓迎すべきであります。しかしそれが科学の果実を得るためだけの施策であるならば、地下のベルツから再び鋭い批判を浴びせられるであります。

科学と技術は本来全く別のものとして発展して参りました。科学が技術に直結するようになったのは19世紀以降であり、最近では技術が新しい科学の発展を促すようにすらなってきました。しかし科学はあくまでも真理の探求のためのものであって、一義的に技術への応用をめざしたものではありません。技術とは結びつきそうにない科学の分野も多く存在します。わが国では科学技術という言葉が用いられ、科学はすべて技術に結びつくかの如き誤解を生み易くなっています。

諸君の中には自然科学以外の分野の人も多く、また今後研究に従事しない人も多いと思います。しかし科学的な思考法はあらゆる分野で必要であり、科学的な論理なくして欧米の人々に説得力のある話をすることは困難であります。私が希望したいことは、科学的な思考法を身につけるように努力してほしいということであり、そして科学に直接関わる人はもちろん、そうでない人も科学の本質を理解し、わが国に巨大な科学の樹が育つよう努力し、あるいは支援をしてほしいと願っています。

私が感じた第二のことは、最近のわが国における倫理の喪失あるいは道徳の崩壊であります。人には食欲、性欲、金銭欲、名誉欲など様々な欲望が、そ

れもしばしば過度に存在します。この欲望は恐らく生物がその進化の歴史の中で、極めて厳しい生存競争を生き抜くため、獲得した性質でありましょう。そしてこの強い欲望が人類の進歩の原動力になったこともまた事実であります。しかし人間の持つこの欲望が過度にわたると、社会を形成する上には障害となりましたので、これをコントロールするため、人はタブーを、宗教を、あるいは道徳を生み出して参りました。しかし近代社会に至って個人の自由の意義が強調されるようになりますと、宗教や道徳がそれまで持っていた規範的統制力は衰え、個人の欲望が肥大化する傾向を見せるようになりました。とくにわが国では伝統的な道徳が戦争に利用されたこともあって、戦後はそれに対する否定的な態度が一般的となり、他方それに変わる新しい倫理を確立することができませんでした。その間経済はめざましく発展し、ともすれば経済一辺倒の、そして個人の欲望本位の考え方が広まってしまいました。最近話題になっている薬害、いじめ、フロン、住専等の問題も、こうした戦後日本社会の動向と深く関わっているものと思われます。そこに私たちは人間としての、あるいは職業人としての倫理と責任を忘れ、自己中心の過度の欲望に走った人々の醜い姿を見ることができます。

しかし人間は過度の欲望を制御せざるを得ない状況にたち到っています。富を、豊さを求める人間の活動はますます規模を拡大し、資源は根こそぎ利用されて枯渇の危機にあり、そして地球環境は著しく破壊されています。このことは発展途上国でとくに顕著であります。私達は那些人達をとがめることはできません。それは先進国の巨大な経済活動に伴う消費のために、途上国における環境の破壊が進んでいるという面が強いからです。この状態が続けば地球上に住む夥しい生物の多くは死滅し、ひいては人間の生存すら危うくなります。広い宇宙の中でも稀な、生命の息づく地球の青さを守ること、それは現代人に課せられた大きな責務であります。

そのためには人類の長い歴史をふり返ってみる必要があります。かつて人間は営々として土地を耕して作物を植え、また家畜を飼育して生きてきました。労働は最大の美德であり、土地は生命の糧を生

み出す恵みの母でありました。“一所懸命”という言葉が生まれたのも、土地の大切さを示すものであります。バブル経済の時に行われた土地転がしなどは、古い時代の人には考えられなかったことであり、異常な経済活動であったと思います。

人間はまた自然の力を恐れ、農業や牧畜のためにも自然を過度に傷めつけることはありませんでした。それをすれば直ちに報いが来ると信じていたからでありましょう。技術が未熟であるため、農業の収穫も、漁業や牧畜の収益も限られたものでありました。従って儉約は生活を守る最も重要な規律でありました。戦前のわが国の道徳の多くは、この日本列島に長く住んだ先人の知恵として生まれたものであります。

最近わが国は今まで経験しなかったほど豊かになりましたが、その結果かつての美德は貧乏くさいとして棄て去られてしまいました。次々とモデルを変える商品を使い棄てにするライフスタイルが、最も現代的であると考えられるようになったのであります。そのため人は貧欲となり、より収入を多くして欲望を充足させることに熱中しました。それが昨今の様々な事件に、象徴的に現われていると言えましょう。

いま我々は、戦後日本の経済最優先の、そして欲望肥大の社会的風潮を反省し、新しい倫理の確立を目指すべき時にあります。それは一人一人の人間がかけがえのない尊厳な存在であることを基本に据え、地球上の全ての人々が、支え合い助け合うことのできる倫理、さらに言えば人のみでなく全ての生物が共生することのできる倫理でなければなりません。それはまた人間が広大な宇宙の、あるいは大自然の中の小さな存在であるという厳粛な事実を謙虚に受けとめるものでもあります。しかしこのような新しい倫理を確立することは決して容易なことではありません。それは人間を無条件に特別視する近代の哲学を、ある面では否定するものであるからです。21世紀に相応しい新しい倫理を確立することができるもの、それはこれからの社会で活躍する若い諸君であります。私が諸君にとくに言いたいこと、それは良く生きて欲しいということ、そのためには緊張に満ちた倫理感を終生持ち続けてほしいということでもあります。物質的な富によって、あるい

はそれを求める余り、この倫理感を失ってほしくないのです。

私の世代は第二次世界大戦の敗戦によって、経済的にはどん底の生活を経験しました。しかし戦争中の長く暗い時代をくぐり抜けた私どもは、新しい時代の夜明けを期待して心を躍らせ、精神的には豊かさのある時代であったと思います。その当時と違って現在は物質的に大変豊かな時代となりましたが、心の豊かさは失われてきてはいないでしょうか。今、私達は世界に誇りうる科学と文化を日本に育

て、心の豊かさを取り戻す努力をしなければなりません。

私は人間の叡智を、生命力のたくましさを、そして若い人々のエネルギーを信じています。人類は必ずや、人間が尊厳ある存在として生きるに相応しい新しい世紀を切り拓いて行くであります。諸君はこれから地球を舞台に、その豊かな知性と行動力で幅広く活動して下さい。諸君の前途が幸い多いものになることを祈って、私の式辞と致します。

修士学位授与式における総長のことば

平成 8 年 3 月 25 日

総 長 井 村 裕 夫

本日ここに元総長、名誉教授の諸先生、各研究科長、教職員の御臨席のもと修士学位授与式を挙行し、それぞれの専攻にかかる修士の学位記をお渡しすることができましたことは、京都大学として誠に喜びとするところであります。

本日修士の学位を得られた皆さんは、文学72名、教育学17名、法学62名、経済学49名、理学250名、薬学65名、工学694名、農学193名、人間・環境学109名、合計1,511名であります。このうちには社会人専修コースを終えた方も含まれています。大学院入学以来今日までの皆さんの御努力に心から敬意を表するとともに、所期の目的を達成され、修士の学位を得られたことに心からの祝福を贈りたいと思います。

皆さんの中には大学院の博士後期課程に進学し、あるいは研究機関に就職して、いよいよ本格的に研究者の道を歩む人がかなり多いと思います。また社会に出て、あるいは社会に戻って、今日まで学んだ専門知識を生かして活躍される方も多いであります。いずれにせよ新しい知識を生み出し、またはそれを社会に生かす仕事に従事されることとなります。21世紀は知識の時代、知識が大きい価値と力を持つ時代であります。皆さんの活躍される分野は益々広がるであります。

昨年秋には京都で第54回日本癌学会総会が開催されました。昭和30年に開催されて以来、実に40年ぶりの癌学会でありましたので、京都大学の生んだ偉

大な癌研究の先達である藤浪^{あきら}鑑先生の業績を偲ぶ特別企画を計画し、杉山武敏教授が資料の発掘等に尽力されました。以下は医学に関する話題ですが、学問全体に通ずるものがありますので、お話ししたいと思います。

藤浪 鑑先生は、1870年に愛知県にお生まれになり、1895年東京医科大学（現東京大学医学部）を卒業されて病理学を専攻されました。1896年ドイツへ留学、有名なウィルヒョウ、ツィーグラールおよびレックリングハウゼンのもとで学んだ後、1900年30歳の若さで京都帝国大学医科大学の教授に就任されました。

先生は1908年たまたま養鶏場で見出された鶏の腫瘍が肉腫であることを発見され、1909年に論文として発表されました。また翌1910年には、この肉腫の継代移植が可能であることを明らかにされました。ほとんど同じ頃1910年にアメリカのF.P. ラウスも鶏の肉腫を報告し、翌11年にはこの肉腫は、すり潰して濾過器を通した後でも移植できることを見出しました。藤浪先生も肉腫の移植は細胞がないと思える状態でも行えることを実に詳しく検討され、ラウスより少し遅れて、1913年に濾過器を通して移植できることを発表されました。当時すでに濾過性病原体（現在の名称はウイルス）の存在が知られていましたので、細菌濾過器を通して移植できることは、腫瘍の原因が化学物質かウイルスによることを示したものであります。しかし藤浪先生は慎重で、

濾過性病原体（すなわちウイルス）説にも言及しておられますが結論は出されませんでした。

しかし腫瘍が濾過性の物質によって起こるとする学説は、当時としては極めて革新的な考え方であったため一般には受け入れられず、強い反論が出ました。当時の濾過器は必ずしも完全なものでなかったため、細胞が濾過されて移植可能となったのではないかという反論が代表的なものでありました。このため藤浪先生は腫瘍を乾燥させたり、自己融解や腐敗させても移植可能であることを強調され、論争を展開されました。しかし当時の技術ではそれ以上の研究が困難であったので、研究は次第に下火となりました。そして藤浪肉腫は、日本では途絶えてしまいましたが、幸いにして乾燥した状態でイギリスに送られた腫瘍が、ロンドンの医学研究所農場研究室で継代保存され、後に研究に使用できました。

1950年代に入るとウイルスによる発癌の研究が活発となり、ラウスの肉腫がよく用いられるようになりました。長生きしたラウスは1966年ノーベル生理学・医学賞を受賞しましたが、1934年に亡くなった藤浪先生にはその機会は与えられませんでした。

因みにラウス肉腫を起こすウイルスの持つ遺伝子がその後明らかにされ、src と名付けられました。これが癌を起こすいわゆる癌遺伝子研究の発端となり、その後癌を起こす癌遺伝子や、癌の発生を抑制する癌抑制遺伝子が次々と発見されて、今日の癌研究の隆盛を導いたのであります。

なお藤浪肉腫ウイルスについてもその後日本人の渋谷正史氏、花房秀三郎氏らにより解析が進められ、fps という癌遺伝子によることが明らかにされて、ラウス肉腫と藤浪肉腫は成因が異なることが確認されました。

さて藤浪先生の事跡を調べて、私は学問には一つの流れがあることを痛感致しました。藤浪先生の東京帝国大学における恩師は山極勝三郎教授であります。山極教授は1915年にウサギの耳にコールタールを塗って皮膚癌を作った人で、化学物質による発癌実験では世界で最初の成功例でした。藤浪先生は腫瘍の研究では師の山極教授より一歩先んじておられますが、腫瘍への興味はあるいは山極教授からの影響もあったかも知れません。また藤浪先生の弟子の一人 今 裕氏は北海道大学の、林 直助氏は名古屋

屋大学の教授に就任されましたが、その後それらの大学から多くの癌研究者が輩出しました。

一方京都大学においては、天野重安教授がウイルスと癌の研究を引き継がれ、ウイルスによって起こるマウス白血病について秀れた研究を展開されました。そうした業績が基礎となって京都大学に1956年にウイルス研究所が設立されました。これは天野教授とは直接の関係はありませんが、この研究所から、後に高月 清、日沼頼夫教授らの研究によってヒトの白血病を起こすウイルス、HTLV-1 が、アメリカのガローとほとんど同時に独立して発見されました。これはヒトにおける白血病ウイルスの最初の報告となりました。このように藤浪先生の研究の流れは、様々な形で、また日本のみでなく外国でも引き継がれて発展しています。藤浪先生は臨床と協力して医療の現場で問題を発掘し、詳しい観察と様々な手法を用いて真実の解明に努められ多方面で業績を挙げられました。また外国人教授を招へいしようと努力するなど進取の気性に富んでおられました。先生の科学への情熱と研究への態度は、先生の影響を受けた多くの研究者に引き継がれ、現在も京都大学に生きているものと、私は信じています。

研究は本来研究者個人の創意によって行われるものであります。しかしどのような研究テーマを選ぶか、どのような研究方法を取るか、どのように理論を組み立てるかについては、研究者は知らず知らずの間にその分野の先達から多くのことを学ぶのであります。秀れた天才によって全く新しい学問が生み出されたように見えても、仔細に調べてみると必ずその発見に到る学問の流れが存在致します。私たちはそうした学問の流れを大切にしながら、自らの研究を完成して行かねばなりません。藤浪先生の足跡を調べ、その後のこの分野の研究の発展を辿って、私は改めて学問の流れを継承し、先人の努力の跡を辿ることが研究には大変重要であることを強く感じました。

皆さんは2年間伝統ある学問の府である京都大学で、専門の学問を学び研究に従事されました。その中でたとえ意識しなくても多くのことを学んだ筈であります。それらは必ずや、今後の生活の中に活かされるでありましょう。皆さんのこれからの御活躍を祈って私の式辞と致します。

博士学位授与式における総長のことば

平成 8 年 3 月 25 日

総 長 井 村 裕 夫

本日ここに各研究科長、教職員の御臨席のもと学位授与式を挙行し、課程博士270名、論文博士106名、計376名の方々に博士の学位を授与することができましたことは、京都大学として誠に喜びとするところであります。今日までの皆さんの御努力に敬意を表するとともに、多くの困難を乗り越えて研究者としての重要な関門を越えられた皆さんに、心からのお慶びを申し上げます。

とくに今回は文学、経済学、法学などの研究科から計32名の課程博士が生まれました。人文社会学系の博士の意義が、変化しつつあることを示すものでありましょう。また新設の人間・環境学研究科から、9名の課程博士が誕生したことも、京都大学としては大変嬉しいことであります。まだ不十分な設備の研究科でよく努力され、博士の学位を得られた皆さんに、心から敬意と祝意を表します。

皆さんの中には今日までの成果を生かして今後も研究に精進されたり、若い人の研究の指導に当たられる方が多いでありましょう。また研究の成果を社会や生産活動に生かす仕事につかれる方もあるかと思えます。いずれにせよ研究に深く関わって行かれることは疑いがありません。そこで日本の研究の現状について、特にそれが一つの転換期にあることをお話したいと思えます。

第二次世界大戦後のわが国は欧米の学問のレベルに追いつくことを最大の目標として参りました。多くの若い人々が欧米へ留学して最新の知識や技術を持ち帰り、わが国の学問の発展に貢献しました。そして現在わが国の学問はかなり高いレベルに達しました。しかしそれは基本的には欧米追随型であって、わが国独自の学問はまだ少ないと言わざるを得ません。従って欧米におけるわが国の学問の評価は決して高いとは言えない状態です。

それを端的に示す現象があります。わが国から欧米諸国へは極めて多くの研究者が留学しますが、欧米諸国からわが国へは留学は少なく、典型的な不均衡アクセスの状態です。その理由の一つとして、わが国には世界によく知られた設備の整った研究の拠

点、いわゆる center of excellence (COE) がないことが指摘されて参りました。

そこで文部省は、平成4年に出された学術審議会の建議を受けて平成7年より COE 育成のための費用を予算化しました。COE 形成プログラムでは、平成7年度に最初の公募が行われ、京都大学からも一件が採用されました。

それでは COE とは何かと言いますと、人によって若干考え方の相異がありますが、世界のトップレベルの研究が行われて、そのことが世界で認知されており、知的交流が盛んで若い研究者が育つところであると言つてよいでありましょう。しかしこのような COE は単に予算がつくだけですぐ形成されるものではなく、関係者の懸命な努力が必要であります。それではどのような努力が必要であるのか、それを知るために世界の COE がどのように形成されたかを少しふり返って見たいと思います。

ケンブリッジのキャベンディッシュ研究所は28名のノーベル賞受賞者を生み出した世界に冠たる COE であります。その中には原子核物理学を確立したラザフォード、中性子の発見者チャドウィック、DNA の構造を解明したワトソン、クリック、ウィルキンス、超伝導体のトンネル効果を見つけたジョセフソンといった、20世紀を代表する研究者が綺羅星のように名前を連ねています。とりわけラザフォードが所長をつとめた1920年代と1930年代は、ノーベル賞受賞者と未来の受賞者が10名以上もひしめきあい、人々が能力を最大限に発揮して仕事ができ黄金期でありました。それは丁度原子核物理学の勃興期であったという“天の時”が幸いしたと思われませんが、同時にキャベンディッシュ研究所という“地の利”もあったことは疑いありません。それではどのような点が秀れていたのか、私の考えを申し上げてみたいと思います。

その一つは秀れたリーダーが所長を長くつとめて、研究所の発展の牽引車となったということであり、初代のマックスウェルが8年、28歳の若さで所長に選ばれた3代目のJ.J. トムソンは34年、

4代目のラザフォードが18年所長をつとめました。第二に全世界から俊才が集まり、しかもその人達が自由に大学の間を移動して研究したということでもあります。ラザフォード自身ニュージーランドで大学を出て、キャベンディッシュ研究所で研究をし、マクギル大学、マンチェスター大学の教授を経てキャベンディッシュ研究所の所長になっています。その下でオーストラリア生まれのL.ブラッグ、ロシア人のカピッツァ、日本人の清水武雄など多くの外国人が研究をしました。第三に若い人々が自由に自分の発想を伸ばして研究ができたことです。例えばブラッグは25歳でノーベル賞を受賞し、最年少記録を作った人ですが、X線による構造解析の理論をキャベンディッシュ研究所で考えたのは、21歳の時でありました。

こうしたキャベンディッシュ研究所の特徴は、他のCOEにも共通した点であると考えられます。アメリカのロックフェラー研究所も13人のノーベル賞受賞者を生み出した世界的に有名なCOEであります。1901年にロックフェラー研究所が設立された当時のアメリカは、現在の日本のように経済力はあったが、学問的には後進国でありました。初代所長のS.フレクシナーは秀れた先見性を持って研究所の

建設を進め、全世界から人材を集めました。フランスからA.カレル、オーストリアからK.ランドスタイナー、日本の野口英世などであります。また当時のドイツの研究所とは異なり若い研究者に思い切って研究の自由を与えました。更に感染症を研究の中心におきましたが、必ずしもそれにこだわることなく研究者が自由に研究を発展させることを許しました。例えばT.アベリーは肺炎双球菌の研究から出発しましたが、遺伝子に興味を持つようになり、1945年に遺伝子の本体はDNAであることをつきとめました。またフレクシナーは30年以上にわたって所長をつとめ、研究所の発展に大きく貢献しました。

少し長々とCOEのことについて話しましたが、私が申し上げたいことは、学問の発展のためには、生き生きとした自由な発想ができる環境が必要であるということです。今日学位を得られた若い研究者の皆さんは、自分の進路を狭い枠の中に閉じ込めることなく、思い切って広い世界に飛び出して行く勇氣を持ってほしいと思います。また後進を指導する立場に立つ人は、若い人々の自由な発想を尊重し、伸ばしてほしいと願っています。

大学の動き

平成7年度修士学位授与式

3月25日(月)午前10時から、総合体育館において奥田 東元総長並びに名誉教授をはじめ研究科長等の出席のもとに平成7年度修士学位授与式が挙行された。

総長から各研究科修了者代表に、学位記が授与された後、総長の式辞があり、午前10時30分に終了した。

た。

本年度の修士課程修了者は、文学研究科72名、教育学研究科17名、法学研究科62名、経済学研究科49名、理学研究科250名、薬学研究科65名、工学研究科694名、農学研究科193名、人間・環境学研究科109名の計1,511名であった。

平成8年3月博士学位授与式

3月25日(月)午後1時から、総合体育館において、各研究科長をはじめ総合人間学部長、学生部長、事務局長出席のもと、平成8年3月博士学位授与式が挙行された。

総長から、各授与者に対し学位記が手渡された後、総長の式辞があり、午後2時15分終了した。

本年3月の学位授与数は、課程博士270名、論文博士106名の計376名であった。この中には初めて課

程修了者を出すことになった人間・環境学研究科 9 名も含まれている。

各研究科別内訳は次のとおりである。

文学研究科 20名 (18名, 2名)
 法学研究科 4名 (3名, 1名)
 経済学研究科 20名 (11名, 9名)
 理学研究科 87名 (73名, 14名)

医学研究科 64名 (52名, 12名)

薬学研究科 19名 (14名, 5名)

工学研究科 104名 (63名, 41名)

農学研究科 49名 (27名, 22名)

人間・環境学研究科 9名 (9名, 0名)

※ () 内の前の数字は課程博士, 後の数字は論文博士を示す。

平成 7 年度卒業式

3月26日(火)午前10時から, 総合体育館において奥田 東, 岡本道雄元総長並びに名誉教授をはじめ部局長等の出席のもとに平成 7 年度卒業式が挙行された。

京都大学交響楽団と京都大学合唱団による学歌斉唱の後, 総長から, 各学部代表に学位記が授与された。

続いて, 総長の式辞があり, 最後に「蛍の光」を全員が合唱して, 午前10時50分に終了した。

本年度の新学士は, 文学部229名, 教育学部87名, 法学部423名, 経済学部293名, 理学部306名, 医学部97名, 薬学部88名, 工学部995名, 農学部331名の計2,849名であった。

医療技術短期大学部の動き

平成 7 年度医療技術短期大学部卒業式・修了式

医療技術短期大学部では, 3月16日(土)午前10時から, 本短期大学部講堂において来賓の臨席のもとに, 短期大学部卒業式及び修了式を挙行了。式は卒業証書・修了証書授与, 学長式辞, 来賓祝辞と進行し, 午前11時終了した。卒業生は, 看護学科78名, 衛生技術学科36名, 理学療法学科20名, 作業療法学科21名で, 修了生は, 専攻科助産学特別専攻20名の計175名であった。

(医療技術短期大学部)

